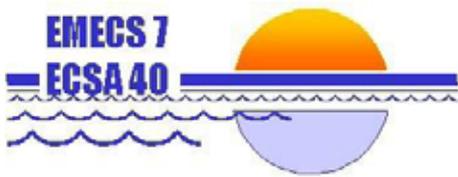


第7回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS7/ECSA40) 会議結果概要報告



2006 (平成 18) 年 5 月 9 日 (火) から 12 日 (金) までの 4 日間、フランス バス・ノルマンディー地域圏 カルバドス県 カーン市のカーン・エキスポ・コンgresセンターを会場として、「閉鎖性海域の持続可能な共同発展：私達の共有責任」をメインテーマに、第7回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS7/ECSA40) が、25 カ国から約 350 人の参加を得て開催された。その結果等について報告する。

開催期間：2006 (平成 18) 年 5 月 9 日 (火) ~ 12 日 (金)

開催地：フランス バス・ノルマンディー地域圏 カルバドス県 カーン市

会場：カーン・エキスポ・コンgresセンター ほか

メインテーマ：「閉鎖性海域の持続可能な共同発展：私達の共有責任」

趣旨：

第7回世界閉鎖性海域環境保全会議 (EMECS7/ECSA40) は、「共同発展」と「共有責任」というテーマのもとに開催された。この二つのテーマは、環境は全ての人のものであり、将来の世代が恩恵を受けられるように、私達、大人は環境を持続的に利用し、保全する責任を負うべきであるということである。重要な点は、科学、教育学、社会経済学など多方面に渡る学際的な会議であり、主たる目的は、教育と政策立案との連携が多方面に渡るよう促すことである。

この会議では、教育を通じ、また、地域からの参加を得て、天然資源と環境の保全及び環境に関する啓蒙が統合されたものとなることを目指している。

< 会議開催結果 >

1 開会セッション

日時：2006 年 5 月 9 日 (火) 9:15 ~ 12:00

場所：カーン・エキスポ・コンgresセンター

参加者：約 350 名

(1) 開会式

EMECS7/ECSA40 国際組織委員長のニコル・ル・ケルレ カーン大学学長の開会挨拶、地元からプレエル カーン市副市長、デューイズム バス・ノルマンディー地域圏代表 (副知事)、ロンボ ノルマンディー・セーヌ



水道事業団代表の歓迎挨拶、更にフランス中央政府からブジーユ エコロジー持続可能開発省の大臣代理による歓迎挨拶の後、各主催者（EMECS、GEMEL、ECSA）代表が挨拶を行った。

（財）国際エメックスセンター理事長の井戸敏三 兵庫県知事からは、次のような趣旨の挨拶があった。

阪神・淡路大震災時の世界からの支援に感謝する。いま、世界の防災・減災に協力しており、国際防災復興協力機構の支援や国連人道問題調整事務所の緊急対応基金への拠出をしている。今回会議でも特別セッション「アジア太平洋沿岸セッション」において、インド洋津波を取り上げることにしている。

エメックス会議は、1990 年以來 6 回開催してきた。会議のテーマも、環境の保全・利用、沿岸域の統合管理、陸海の相互作用、参加と連携、環境の修復・創造、環境教育が取り上げられてきた。

大きな関心としては、環境の修復・創造および環境教育がある。規制と負荷削減対策中心から、美しく豊かな海に回復するため瀬戸内海再生に取り組み、また、環境教育では森・川・海のフィールドで全県あげて取り組んでいる。地球温暖化対策は見過ごせない。京都議定書の枠組みは動き出したが、モントリオール・サミットで米国、中国、インドを含む新たな枠組みづくりがスタートしたことを歓迎する。

今回会議のテーマは、将来世代が恩恵を受けられるよう、私たちが環境を持続的に保全・利用する責任を負うべきだとの考えに基づく。直接の環境影響だけでなく、地球温暖化のように空間・時間的な影響、例えば化石エネルギー使用は島嶼国の海岸侵食にも関連している。

国際組織委員長のカーン大学ル・ケルレ学長、EMECS7/ECSA40 実行委員長デュクロトワ英ハル大学名誉教授はじめ GEMEL のメンバーなどに感謝する。様々な国・地域から多数の参集を感謝し、前回会議から進んだ議論がされることを祈念する。



(2) 基調講演

基調講演では、2 名の学識者による講演がおこなわれた。（財）国際エメックスセンター会長の茅陽一 東京大学名誉教授からは、北大西洋における海流の大（熱塩）循環への影響等について、英ニューキャッスル大学のスチュアート・エバンス教授からは、沿岸海域の環境保護を我々の共有責任として、その統合的な管理の重要性についての講演があった。

1) 「沿岸域への気候変動の影響と可能な対応」

茅 陽一（（財）国際エメックスセンター会長、東京大学名誉教授）



地球の気候変動の要因としては、海面上昇や農業活動による緩やかな影響と、人口増による劇的な変動による影響に区別される。劇的な変動例としてグリーンランドの氷塊が溶けて、それによる降雨量の増加により海面表層の比重が軽くなり、結果として気候を左右している海流の動きを阻害し、急激な寒冷化が起きることを説明された。これらの要因は、地球温暖化ガス（CO₂）の増加による温暖化であることから、世界的な協力により温暖化ガス排出の抑制に努力すべきであることを訴えた。

- 2) 「共有する責任：沿岸域管理のためのコミュニティ活性化手法としての環境プロジェクトへの参加」

スチュアート・エバンス（英ニューキャッスル大学教授）

共有責任をテーマとして、共有責任の事例としてプリス-ハートレイ砂丘で行われた自然環境保護活動を例として各活動を段階（自然の現状、歴史的変遷の調査、環境問題の把握、



環境保護と提案)に分類し、どのような活動を行ってきたか、説明があった。沿岸域の環境保護を進めるに当たっては、情報を共有し、各主体（住民、科学者、地方行政体、企業等）によって責任を分担し同じゴールに向かうこと、つまり統合的沿岸域管理が強く望まれると結論づけた。

2 欧州沿岸海域セッション

日時：5月9日(火) 12:00～13:40

場所：カーン・エキスポ・コンgresセンター

参加者：約 200 名

内容：

EMECs7/ECsA40 の開会式並びに基調講演に引き続き、欧州沿岸海域セッションが開催された。

この欧州沿岸海域セッションでは、EMECs7/ECsA40 の開催にちなみ、開催国のフランスを取り巻く、北海/バルト海、地中海、及びイギリス海峡に関して事例発表を含めた、それぞれの沿岸海域における環境問題に対する取り組みに関して、3人の専門家による講演が行われた。

それぞれの講演では、欧州の沿岸海域の生態系システムの自然可変性（変動/ゆらぎ）および複雑性について、現状とその最新の取り組みが紹介された。

- 1) 「北海とバルト海における科学と管理：歴史と現在の脅威と将来への挑戦」

マイク・エリオット（英ハル大学教授）

北海とバルト海の特徴について、歴史、地理、利用などの状況を紹介し、各海域の気候変動、水質、漁獲高等の現状を踏まえ、バルト海の汚染が深刻であることが強調された。北海、バルト海については国連環境計画（UNEP）などの環境管理計画が進められており、今後の方向として環境と社会の調和、環境に優しい環境管理システムの導入が望まれると総括した。



- 2) 「地中海沿岸の管理 地域レベル」

エルダ - ル・オーザン(MEDCOAST 会長)



地中海沿岸域の国数、地理、海域の特徴を紹介し、沿岸諸国における沿岸域管理手法の開発過程に関する EU 及び UNEP、ユネスコ（UNESCO）等の国際機関、地中海沿岸国際会議（MEDCOAST）、世界自然保護基金（WWF）等の NGO のプロジェクトが紹介された。

約 30 年間にわたる地中海沿岸域における共同管理の取り組みについて、さまざまな事例を引用しながら紹介し、今後の継続的な共同管理とさらなる発展の重要性を訴えた。

3) 「欧州大陸西部の広域海域：フランス側の北海、イギリス海峡、大西洋の沿岸域の事例」

ジャン・クロード・デュバン（仏リール大学教授）

イギリス海峡、フランスの大西洋沿岸について、沿岸線、波高、河口の特徴など地理的様相の紹介と、自然的、人為的な側面から環境の現状や問題点が紹介された。問題としては、海流の速さや海面上昇による沿岸侵食、海上交通による油汚染、人口増による海域の富栄養化が起きており、今後、沿岸生態系に関する知識の向上、EU における環境政策の法的課題を統合する必要性を訴えた。



3 特別セッション

EMECS7/ECSA40 では、以下の 3 つの特別セッションが設けられた。特に、アジア太平洋沿岸セッションは EMECS2001 から、青少年環境教育交流セッションは、EMECS 2003 からの経験を引き継ぎ、継承されているセッションであり、セッションとしての更なる進展も見られ、今後も継続を望む声が強くなった。

(1) アジア太平洋沿岸セッション

日 時：5 月 10 日（水）9:00～12:30

場 所：カーン・エキスポ・コンgresセンター

参加者：約 60 名

内 容：

アジア太平洋沿岸セッションは、第 5 回エメックス会議（2001 年開催）のアジアフォーラムの提言を受けて、APN センター、国際エメックスセンターが進めてきたアジア太平洋沿岸域の現状と政策提言に向けての書籍の出版と、スマトラ沖地震による津波や台風などの被害を教訓にした沿岸域の危機管理と環境保全の提言を行うことを目的に開催した。



最初に、井戸敏三（財）国際エメックスセンター理事長・兵庫県知事からの歓迎挨拶に引き続き、第 5 回エメックス会議のアジアフォーラムの提言に対する成果として APN 及びエメ



ックス活動の紹介があった。続いて、アジア太平洋の沿岸域の脆弱性と危機管理に関する講演があり、台風の年次発生数や日本の沿岸防災対策の状況やハリケーン・カトリーナの被害状況を説明し、対策としてハード的（防潮堤）なものとソフト的（地域の人を含めた災害ハザードマップの作成、環境学習）なものがあると結論付けた。

その後、スマトラ沖地震の津波による関係諸国の状況と取り組みに関するタイ、インドネシア、スリランカの実例、および沿岸域統合管理のための津波後の方向性についての紹介があ

り、続いて、復旧活動とその教訓について講演があった。

パネル討論は、ニック・ハーベイ（オーストラリア アデレード大学教授）コーディネーターより、講演者へ質問し答える形式で進められた。

最後に、コーディネーターより、沿岸域の脆弱性は人口の集中が原因であり、この津波を忘れずキリバスなど人口の集中していない国にも目を向ける必要があるとの総括があった。

(2) 青少年環境教育交流セッション

日 時：5月10日（水）～ 5月11日（木）

場 所：カーン・エキスポ・コンgresセンター、他

参加者：約 60 名

日本 2 名（高校生）、米国 6 名（中学生 4 名、学生 2 名）、フランス 11 名（中学生 2 名、高校生 9 名）、タイ 1 名（学生）及び指導教員、一般参加者 等

内 容：

青少年環境教育交流セッションは、参加者（青少年）が水を中心とした環境保全の取り組みを紹介することにより、各国の情報を共有するとともに、次世代を担う各国の参加者の交流を図ることを目的とする。また、セッションのまとめとして、「青少年環境教育交流セッション宣言」が参加者により作成され、閉会セッションにおいて発表された。

本セッションは、ウェン・ベル座長・川井浩史副座長により進行された。

（1日目：5月10日）

日本の高校生から以下の発表の他、アメリカやタイからも各国での独自の取り組みの紹介があった。地元フランスを含めた4カ国からの約20名の学生に、教職員等や一般参加者も加わり、各発表後、活発な質疑応答がなされ、参加者の環境に対する関心の高さが伺えた。また、



井戸知事もセッションに参加し、ため池の保全と活用に関する質問に対し、ため池の安全管理の重要性や多目的利用の促進、農業従事者による管理から地域や利用者による管理への移行の必要性について補足説明を行った。

その後、座長よりいくつかのキーワードの提供がなされ、参加者から持続的な環境保全を行うために何が必要かの議論が行われた。参加者からは、継続的な取り組み、学校教育における環境問題の扱い、都市化による自然とのふれあいの機会の減少等の問題点が挙げられ、これらの問題点から、スウェーデンなどで行われているような環境教育がますます重要であるという認識が持たれた。これらの議論を元に、本セッションの宣言文の起草が参加学生達により行われた。

= 日本人学生参加者並びに発表テーマ =

- ・ 迫之上杏奈（兵庫県立農業高等学校3年）
「守れ！先人の財産～いなみ野ため池群世界遺産化計画～」
- ・ 有田祐起（広島学院高等学校3年）
「水富栄養化の原因となる物質の除去に関する研究」

(2日目:5月11日)

各国の参加者が、ノルド川河口域にある湾に移動し、浜辺に打ち上げられているさまざまな漂着物を拾い、それらを4分別(植物由来、鉱物由来、動物由来、人工物由来のもの)するという活動を実際に体験した。これは、ブラインヴィレ中学校1年生の活動として湾内で行われているものである。その後、ブラインヴィレ中学の生徒が、これら漂着物の与える影



響や害について生態系との関わりを交えながらボードや写真を用いた解説した。

体験後、デュモン・ダーヴィル高校へ移動し、校内の案内を受けた。昼食後、学生同志の交流を深める目的で、デュモン・ダーヴィル高校の生徒らが案内役を勤めて市内散策を行い、文化の相違などを話し合う機会を持った。

(3) UOF (仏海洋科学者連合) 若手研究者フォーラム

日時: 5月9日(水) 14:30~5月10日(木) 12:05

場所: カーン大学

内容:

UOFフォーラムは、現在、博士課程に在籍する学生達を中心に、国際的な研究の場を広く提供することを目的に、ミニ・フォーラムとして開催された。他の2つの特別セッションとは異なり、運営はEFMS(欧州海洋科学者連合)が行い、会場は、カーン大学の全面協力を得て大学で開催された。

フランスを中心にヨーロッパから海洋環境に関連する様々な分野(社会科学、地理学、化学、生態学など)の若手研究者の参加があった。テーマや発表形式も、EMECs7/ECsA40と同じに設定し、口頭発表またはポスター発表を通じて、参加者はグローバルな経験が得られた。<口頭発表5、招待発表2、ポスター発表3>

また、参加者の中から、以下のベスト発表およびベストポスターが選ばれ、閉会セッションで表彰された。

<ベストコミュニケーション賞: UOF賞>

オルリー・フォーヴォー (Station Marine de Wimereux)

「堆積物の表面に付着した有機物、砂利の堆積物に付着した有機物に関する長期にわたる変化の研究」

<ベストポスター賞>

サビーヌ・スタシヨフスキー (LUMAQ, IUT de Quimper)

「situ 微小生態系(マイクロコズム)における、海洋植物プランクトン群集への農薬影響評価ツール」



4 技術セッション

技術セッションは、5月9日午後から12日午前まで次の5つのテーマによる分科会に分かれて、口頭発表及びポスター発表が行われた。また、各セッションでは、活発な質疑応答や討議も展開された。

セッション1: 沿岸海洋科学における近年の進歩

セッション2：生態系の特質：コンセプトとケーススタディ

セッション3：沿岸域管理における新しいコンセプトと新たな経験

セッション4：協働と地域社会からの参画 - 環境問題への継続的な取り組みと啓蒙

セッション5：ネットワークと21世紀における教育 - コミュニケーションの挑戦

(1) 口頭発表

1) セッション1：沿岸海洋科学における近年の進歩

生物多様性・生息域・環境条件の関係を理解すること、物質循環における閉鎖性海域の役割、人為的な移入と回復プロセスなどについて発表と討議が行われ、生物多様性と生息域の多様性の間には明らかな関連があることが確認され、沿岸の回復には、生態学的な新しいレメディエーション手法が有望であり、一層発展させる必要があるとされた。また、数値モデルの効果的な利用とその限界性も議論がなされた。包括的なアプローチの事例として英虞湾の環境修復プロジェクトについて報告があり注目された。

2) セッション2：生態系の特質：コンセプトと

ケーススタディ

主として環境を示す指標等について発表と討議が行われた。生態系の特質を示す指標は多様なものがあるが、時に適切な指標化のためのデータ不足や、調査やモニタリングの改良のための適切な指標の選定などが課題であり、指標をテストおよび相互確認したりすることや、空間及び時間の変化を考慮すべきことなどが指摘された。また、データの共有のためのデータバンクや、指標と施策を分かりやすくしておくこと、地域の主体の参加などが重要であるとされた。さらに、指標やモデルのような施策を計画するためのツールや良い環境の状態を示すものは何か、人的改変と自然攪乱の分離などの課題が指摘された。



3) セッション3：沿岸域管理における新しいコンセプトと新たな経験

地域社会の人と沿岸域との共生・共存のための合理的なビジョンとして、「里海」が評価された。また、沿岸管理の進歩は高度で多面的なものになるとの指摘があるとともに、ICM（統合沿岸管理）には、国際、地域、国、地方の各レベルの連携が必要であるとされた。

4) セッション4：協働と地域社会からの参画 - 環境問題への継続的な取り組みと啓蒙

統合管理には、沿岸域の多様性を認識した体系的アプローチが必要であり、かつ地方によるプロジェクトの支援や住民参加が重要であり、また、地方、地域、国レベルでの関係者間の連携など縦横の統合が必要であるとされた。さらに、このとき人々の文化、歴史、社会的経済的背景を忘れてはならないことが指摘された。



5) セッション5：ネットワークと21世紀における教育

- コミュニケーションの挑戦

体験型環境教育が効果的であることが指摘され、そのためには環境管理と教育を複合的に進め、多方面からの情報や解決策を共有するとともに、その解決策を見いだすには、住民参加を通じたコンセンサスづくりが必要とされることが指摘された。

6) まとめ

これらの分科会セッションを通じて、エメックスの役割として、以下のことが閉会セッションにおいてラポターから提案された。

学際的な科学者間の交流を促進すること

悪化海域の生態学的な修復手法の研究を進めること

若い研究者を支援すること

明確な独自性を持ち包括的な役割を担って地球規模でのICMの改革を進めること

青少年環境交流プログラムを発展させるとともに新しい取り組みを検討すること

環境教育と住民参加における国際交流を推進すること

(2) ポスター発表

口頭発表同様、5つのテーマに沿ってポスター発表が行われた。世界各国から、何れも劣らぬ力作が揃い、参加者達は、ポスターの前で立ち止まり、それらの研究や取り組みを真剣に読み、出展者との議論も行われていた。また、その中から、ポスター選考委員会（委員長：松田治（広島大学名誉教授）委員4名）により、ベストポスター賞・特別賞が選出され、以下の3作品が閉会セッションにて表彰された。



<ベストポスター賞>

瀬口昌洋（佐賀大学教授）

「有明海奥部における貧酸素水塊の発生とその防止法について」

ドゥボア・スタニスラ（仏カーン大学大学院生）

「カキ養殖の及ぼす影響によるガンセキフサゴカイ (*Lanice conchilega*) 個体数に係る底生生物群集：C(炭素)・N(窒素)安定同位体を用いた栄養的アプローチ」

<特別賞>

ウィリアム・リー(米 学生)

「より環境に優しいグリーンスクールを作ろう！メリーランド・グリーンスクールが受賞したボルティモア郡でのプログラム」

5 閉会セッション

日 時：2006年5月12日(金) 14:00～17:00

場 所：カーン・エキスポ・コンgresセンター

参加者：約100名

(1) 地元代表の挨拶

閉会に当たり、地元の代表として下記の方より挨拶があった。

* バス・ノルマンディー地域圏 知事 シリル・ショット

* カーン都市圏共同体 会長 リュック・ダンコブ

(2) ラウンドテーブル

技術・特別セッションごとの総括を下記のラポターより、ラウンドテーブル形式で報告された。

- 1) 技術セッション1：楠井隆史（富山県立大学教授）
- 2) 技術セッション2：ベン・ヤンソン（ストックホルム大学名誉教授）
- 3) 技術セッション3：エルダール・オーザン（MEDCOAST会長）
- 4) 技術セッション4：イザベル・ラス（沿岸・湖岸学会、ノルマンディー地域海洋問題担当）
- 5) 技術セッション5：ドン・マンソン
- 6) アジア太平洋沿岸セッション：
柳 哲雄（九州大学教授）
- 7) 青少年環境教育交流セッション：
アラナ・ウェイズ（ワシントンカレッジ 学生）
- 8) UOF(仏海洋科学者連合)若手研究者
フォーラム：ミシェル・ロメオ
（仏海洋科学者連合）



会場から各ラポターに対して質疑応答を受け、活発な議論があった。
（詳細は、技術セッションの概要を参照）

(3) 表彰式

ポスターセッション賞、UOF賞、Coastal Zone Management 2006賞の表彰が行われた。

1) ポスターセッション賞

松田治ポスター選考委員長（広島大学名誉教授）より、選考方法、選考ポイント等の説明があった。ベストポスター賞に瀬口昌洋（佐賀大学教授）さん、ドゥボア・スタニスラ（仏カーン大学大学院生）さん、特別賞にウィリアム・リー（米学生）さんが展示された約30作品より選出されたことを紹介のうえ、表彰状及び副賞が授与された。



2) UOF賞

UOF(仏海洋科学者連合)若手研究者フォーラムにおいて発表された研究者の中から、UOF事務局より、UOF賞はオルリー・フォーヴォーさん、ベストポスター賞はサビーヌ・スタシヨフスキーさんに表彰状が授与された。

3) Coastal Zone Management 2006賞

エルダール・オーザンMEDCOAST会長に対して、長年の沿岸域研究を称え、米カリフォルニア大学のCoastal Zone Foundationからの表彰があり、デュクロトワEMECS7/ECSA40実行委員長よりオーザン会長に表彰楯が授与された。

(4) 会議宣言

「カーン宣言」が採択されるとともに、今回初めて「青少年環境教育交流セッション宣言」が発表され採択された。

1) 「青少年環境教育交流セッション宣言」の採択

青少年環境教育交流セッションの成果として、参加学生を代表し有田祐



起（広島学院高等学校）さんが、「沿岸域に関する環境保全を行うために最適な環境学習の場と情報を与えてもらい、共有責任として頑張っていきたい」との宣言を読み上げ、満場の拍手を受けて採択された。

2) 「カーン宣言」の採択

宣言起草委員会（ウェン・ベル（ワシントン大学環境科学センター前所長）委員長、委員7名）で会期中に検討された「カーン宣言（案）」について、ウェン・ベル委員長から提示があり、満場一致で宣言が採択された。同宣言の骨子は次のとおり。

<宣言骨子（仮訳）>

地球規模において、すべての人々が経済、文化、環境等の基盤である「共存活動の圏域(working landscapes)」として沿岸海域をとらえ、この圏域を次世代に負の遺産としてではなく、財産として受け継がれるように、「私達の共有責任」が問われている。特に、以下の将来に向けた積極的な施策に留意する必要がある。



- ・我々は、科学者に対して、みんなが共有責任を果たせるように、その知識を政策立案者、市民に伝達するよう願う。
- ・研究者、学者の枠を越えて専門知識を共有、伝達していくためには、一般の人が分かる言葉への置き換えが必要であり、環境教育の専門家やNGOに知識の翻訳者としての役割を期待する。また、EMECSには、会議やワークショップの結果を、広く人々に知らしめるための指導性を期待する。
- ・地元のリーダーや市民自身が、積極的にプログラムを支持し参加してくれるような地元に根づいたプログラムが今後も継承、発展することを願う。
- ・今回の青少年環境教育交流セッションには、多くの学生、教師が参加し、活発で有意義な公開討論が行われたが、我々は今後も心から、青少年環境教育交流が積極的に推進されることを支持する。
- ・地球規模での観点から、南半球、つまり、アフリカ、オーストラリア、南米も含むイニシアチブを追求する必要がある。

(5) 第8回エメックス会議

第8回エメックス会議（EMECS8）の開催地については、陳中原（華東師範大学教授）から、華東師範大学学長メッセージが読み上げられ、中国・上海で2008年10月末か、11月頃に開催したいとの招致があり、満場一致で開催地が決定した。



(6) 総括及び謝辞

主催者を代表して、熊本信夫（財）国際エメックスセンター科学・政策委員長（北海学園大学前学長）より、EMECS7/ECSA40の総括と関係者へのお礼の挨拶が行われ、全ての行事を終了した。



< 関連行事：交流関係 >

1 エメックスナイト

日 時：2006年5月8日（月）18:30～21:20

場 所：カフェ・マンセル

主 催：（財）国際エメックスセンター

参加者：約 120 名

（フランス側）カーン市 プレエル副市長

GEMEL デュクロトワ（ハル大学名誉教授） 等

（科学・政策委員）ローレンツェン（OECD 環境局長）

熊本信夫（前北海学園大学学長） 等

（日 本 側）EMECS 井戸理事長、茅会長

兵庫県会議員 武田国際エメックス推進議員連盟会長

北浦副議長

志摩市 竹内市長 等



内 容：

カーン市の城址内にあるカフェ・マンセルにおいて、日本からの参加者を中心にエメックス会議前夜祭として交流の集いを開催した。地元フランス側関係者や国際エメックスセンター科学・政策委員を招待し、国際的な懇親・交流を図った。

2 ブジージュ仏・エコロジー持続可能開発大臣代理との会談

日 時：2006年5月9日（月）11:00～11:30

場 所：カーン・エキスポ・コンgresセンター

参加者：（フランス側）ブジージュ大臣代理

（兵庫県側）井戸知事、丹羽観光参事兼国際局長、石井環境政策局長 ほか

内 容：

ブジージュ大臣代理は、EMECS 活動に強い興味を持っており、仏の沿岸域対策の概要、特に EU 環境戦略の推進との関係についての仏の姿勢、沿岸域の対策から地球温暖化への対応など広く意見交換を行った。

3 歓迎パーティー

日 時：2006年5月9日（火）18:00～20:00

場 所：女子修道院内レセプションホール（バス・ノルマンディー地域圏庁舎）

主 催：バス・ノルマンディー地域圏

参加者：約 250 名

バス・ノルマンディー地域圏 デション副議長

兵庫県側 井戸知事（エメックスセンター理事長）

県議会団 北浦副議長、武田会長ほか

EMECS7/ECSA40 参加者

内 容：

歓迎会に先立ち、会場である女子修道院のスタッフの案内により、院内の見学を行った。

デション副議長から井戸知事を歓迎してメダルの贈呈があった。副議長からノルマンディーは、イギリス海峡（ラ・マンシュ）に面しており、沿岸域の干潟の保全や環境教育に力をいれ



ているとの挨拶があり、参加者一同、和やかな雰囲気の中で懇親を図った。

今回の地元の歓迎に応じて、国際エメックスセンター理事長として、井戸知事から日本酒の提供があり、地元や海外からの参加者の方々に日本酒を味わって戴く機会があった。

4 Caen la Mer（カーン都市圏共同体）パーティー

日 時：2006年5月10日（水）18:00～20:00

場 所：French Cafe

主 催：Caen la Mer（カーン都市圏共同体）

参加者：約150名

EMECS 科学・政策委員

GEMEL デュクロトワ（ハル大学名誉教授）

ESCA ウィルソン（ダブリン大学教授）

志摩市 竹内市長

九州共立大学 小島教授

EMECS7/ECSA40 参加者

内 容：

地元主催の交流パーティー。9日のバス・ノルマンディー地域圏による歓迎パーティーとは趣を変え、会場をカフェにして、フランスらしい雰囲気の漂う会場で、参加者間の親睦を深める目的で行われた。参加者達は飲物を片手に場所を移動して交流を図る等、国を超えた国際的な交流が展開された。